場面緘黙当事者・経験者の生活上の困難と発話の程度

○ 田中 佑里恵 ・ 船曳 康子 （京都大学大学院人間・環境学研究科）

背景

場面緘黙とは

- **話す能力があるにも関わらず、特定の社会的状況で話すことが一貫してできなくなる状態**
  例）家では話せるが学校ではほとんど話せない
- 不安障害の一種
- 500人に1人程度発症
- 認知度 低、国内の治療・支援・研究 不足

場面緘黙の予後

- 後遺症として様々な生活上の困難あり（久田・浜田，2015）
  ↔具体的な行動・活動　不明
- 発話の程度の変化　国内の量的研究見られず
  →予後予測・介入の検討に必要

目的

場面緘黙当事者・経験者の

- **困難を感じる行動・活動、環境**
- **発話の程度の変化**

— **行動・活動の困難度と発話の程度の関係**　は何か

方法

調査協力者

場面緘黙当事者・経験者271名
平均年齢 27.0±8.5歳、範囲 13ー55歳
内訳（名）
- ・男性49　女性215　その他7
- ・当事者107　経験者163　不明1
- ・診断あり64　診断なし185　不明22

自助グループ・SNSにて依頼

調査方法

Web調査、以下の質問項目を用いた

① **現在一番話しづらさを感じる環境**（自作）
11項目 単一回答

② **現在一番話しづらさを感じる環境における、行動・活動の困難度**（自作）
29項目 6件法　1：とても簡単だー6：とても難しい

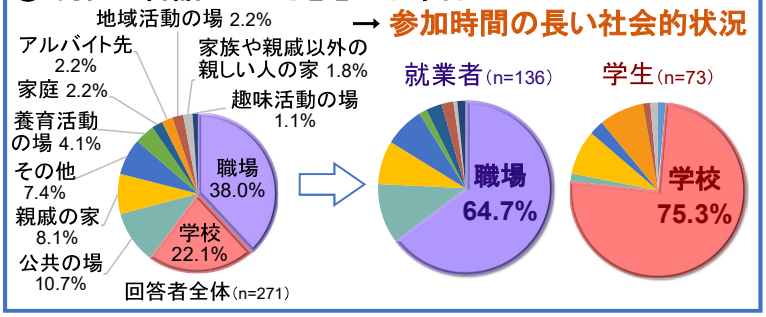
③ **現在の発話の程度**

④ **場面緘黙の症状が一番強かった頃の発話の程度**
SMQ-R（場面緘黙質問票；かんもくネット，2011）一部改
17項目 4件法　0：全くないー3：いつも

結果

① 現在一番話しづらさを感じる環境

→ **参加時間の長い社会的状況**



結果

② 現在一番話しづらさを感じる環境における、行動・活動の困難度 得点上位項目

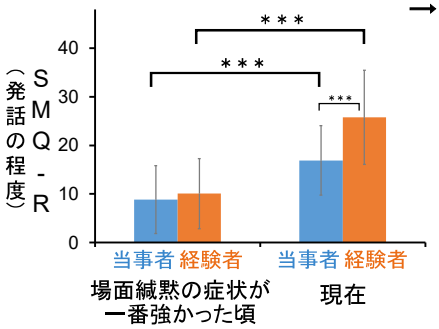
→ 下表の行動・活動に特に困難感

	行動・活動	全体（n=259） 平均	標準偏差
1	複数の人の前でスピーチをする	4.98	1.28
2	3人以上の会話で発言をする	4.83	1.24
3	雑談をする	4.82	1.28
4	周囲の複数の人に聞こえるくらい大きな声で話をする	4.82	1.26
5	誰にでも同じような態度で話をする	4.54	1.32
6	とっさに声を出してリアクションをする	4.53	1.36
7	相手が理解できるように口頭で説明する	4.46	1.33
8	自分から話しかけて伝えるべきことを言う	4.44	1.29

※一要因分散分析：行動・活動の主効果有意（p <.001）
多重比較：表中区切り線の項目間に有意差（p <.05）

③④ 現在と場面緘黙の症状が一番強かった頃の発話の程度の比較

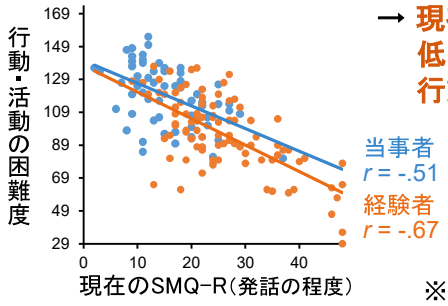
→ **当事者・経験者とも発話の程度 増**



※t検定：＊＊＊p <.001

②③ 現在の発話の程度と行動・活動の困難度の関係

→ **現在の発話の程度が低いほど行動・活動時の困難 高**



※相関分析：p < .01

考察

- 当事者・経験者とも発話の程度改善 ↔ 現在困難な行動・活動、環境あり
- **生活場面での適応に着目した支援・研究**が必要
  △発話の程度の改善のみに着目
- 発話が少なく**困難さの高い当事者への早期治療・支援**
  ＋
  予後ー **経験者の困難さへの継続した支援** が望まれる